

刊行にあたって

わが国における内視鏡下手術は、1990年の腹腔鏡下胆嚢摘出術に始まり急速に発展し、現在では消化器外科領域においては年間約15万件に達し、消化器外科手術の中心となっており、消化器外科医にとって必須の技術となっています。さらに、周辺機器の発達に伴い手術手技も洗練化、高度化してきています。

そのような中で、外科医は常日頃、日進月歩の手術手技を理解、習得し、安心、安全な手術を遂行することが求められています。とくに経験の浅い若手の消化器外科医にとっては、わかりやすく解説された手術手技の入門書が必要であり、その目的でイラストと動画を掲載したシリーズ『ビジュアルサージカル 消化器外科手術』を2018年に刊行し、新しい手術書として高い評価を得てきました。

そこで、この発展目覚ましく充実してきた腹腔鏡下手術に焦点を当て、わかりやすく美しいイラストと豊富な動画を掲載した新たなシリーズ『ビジュアルサージカル 消化器腹腔鏡下手術』を刊行することにしました。前回とほぼ同様に、①上部消化管、②下部消化管、③肝臓・胆道・膵臓・脾臓の3部構成となっています。とくに本シリーズでは、手術手技の解説のみならずその基本となる考え方についても簡潔に記述することに重点を置きました。また一部、ロボット支援手術についても掲載をいたしました。

本書が、若手の消化器外科医にとって手術手技が向上し、内視鏡下手術の技術認定取得のための参考となり、そして何よりも安心、安全な手術の遂行に少しでも資することができれば大変嬉しいことであり、またそうなることを確信しています。

最後に、本シリーズの企画・編集にご尽力いただいた編集委員の先生方と、大変多忙な診療の中、そしてコロナ禍の中、豊富な経験と手術手技をわかりやすく解説し、素晴らしい動画を提供いただいた先生方、そして順調な刊行までご苦勞をいただいた学研メディカル秀潤社の谷口陽一氏に、厚く御礼を申し上げます。

2022年盛夏

編集委員を代表して

上西紀夫

序 文

第15回 日本内視鏡外科学会アンケート調査によると、2019年に大腸癌症例に対し内視鏡下手術が行われた割合は約80%であり、下部消化管疾患に対する内視鏡下手術は標準治療と言えるまで普及を遂げた。また、2018年の保険収載以降、わが国ではロボット支援手術症例も年々増加し、2019年には直腸癌を中心に2,428例のロボット支援手術が行われた。さらに今春(2022年)、結腸癌への適応拡大も承認され、今後さらなる普及が期待される。

内視鏡下手術やロボット支援手術の普及の要因は、拡大視野のもと精緻な解剖を理解しながら手術が可能である特徴を有していることである。一方で、低侵襲性を最大限に活かし、安全に手術を行うためには、内視鏡外科特有の外科解剖の理解と操作のコツを熟知する必要がある。

本書、ビジュアルサージカル 消化器腹腔鏡下手術シリーズ『下部消化管』では、前述のように内視鏡下手術で得られた精緻な解剖を理解しやすくすべく、術中写真やイラストを最大限に多用し、特に重要な手術シーンについては、QRコードを用いて実際の手術動画の閲覧を通じて、外科解剖の理解と操作のコツをマスターできるように工夫した。このように「ビジュアル」に長けた書籍を上梓できたのも内視鏡下手術の優れたイメージングを活かした本書の特色であると考えている。

また本書は、下部消化管の解剖や虫垂切除術など若手外科医に向けた項から、ロボット支援下直腸切除術などの最先端手術、また高度技術を要する側方リンパ節郭清など、各領域のエキスパートの先生方の執筆により下部消化管領域の手術手技を網羅したことが特徴である。若手外科医だけでなく、指導的立場の先生方もご一読頂ければ幸いです。

最後に、本書を出版する機会を頂いた公立昭和病院 院長 上西紀夫先生、多数の画像やイラストを用いてわかりやすく執筆頂いた執筆者の先生方、そして出版にご尽力頂きました学研メディカル秀潤社の谷口陽一氏に心から感謝申し上げます。

2022年6月

大分大学医学部消化器・小児外科学講座

教授 猪股雅史